

## 元気でヤンチャな若者たちこそ地域の宝

楽しい取材であった。今月号の特集内の記事「(株)百姓王」の取材である。時期は田植えの真っ最中。それも急なお願いである。取材時期を変えてほしいと言われるのが普通だろう。代表の森田泰彰さんに仲立ちをしてくれたのは木更津市の米穀商「泉屋」の泉雅晴さんだった。「夜であれば別に会合がなければいつでも大丈夫ですよ」という言葉に甘えて、泉さんから話を聞いたのちにホテルにチェックイン後、百姓王の事務所へ訪ねた。事務所と言っても農協の駐車場に置いた海上コンテナだ。

# 江刺の稲

「江刺の稲」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。まったく管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見せている。「江刺の稲」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。

訪ねると、メロン農家である代表の森田さんと約30haの水稲専業農家の丸文浩さんが待っていた。やがてトマトとカボチャを作っているJ.Aきみつの農協理事とカントリーエレベーターの運営管理もやっているという森田和博さんも顔を出した。大体は、こうした形で三々五々、森田さんらは事務所顔を出し、その後は近くの居酒屋で氣勢を上げているというのが日常のようである。

ルポにも紹介されているが、彼らは全中の平成27年度「地域営農ビジ

ョン大賞優秀賞」受賞という農水省や全中のお眼鏡にかなう優等生ということだろうが、森田さんらは「地域を再建しようなんて建前で活動しているわけじゃありませんよ。面白いからやろう。だって地域や農業の世界を見渡せば僕らの時代が来ることは目に見えている。水稲のコントラクターは見合う仕事。だから、水稲作でもあまり労力的に無理のある春作業は限定的にして秋作業を中心にコントラクターをする。水田部門を中心に、しかもイネのWCSは機械化ができて収益が上がる。それ以上に、皆が面白がっているのはハウス作りを請け負う作業です。要は自分の本業をやりながら、水稲作でもハウス作りでも、自分の家では体験できない仕事を面白がって技術を習得して小遣い稼ぎ。そして、皆で酒飲んで氣勢を上げる。言ってみればお祭りのノリですよ」

構成員の中で水稲の専業は丸さんだけ、だから自分の作業が忙しい丸さんは水稲の作業にはほとんど出役しない。できる人、やりたい人がやるといふ。それもスマホのLINEで「明日こんな仕事があるけど出られますか？」と仲間に呼びかけ手を

上げる。もちろん作業計画は組まれるのだろうが、そんな感じで仕事が行って行く。

「地域のために」なんて言葉を使いたくないのは彼らの照れもあるのだろうが、それぞれが若い自立した経営者で、それも漁師も含む異質な存在である者たちが結果として地域の役に立つ。建前の正義を語っても経済が成り立たなければ続かない。また、必要とされるからこそ経営も成り立つ。

彼らを見てこう思った。地域を守れ、それも様々な政策支援がある前提での集落営農による地域農業の限界。地域の構成員が経営能力や技術力のあるなしにかかわらず「みんな一緒」で運営する集落営農。それも老人の声が大きく、これからの時代がどうなるかなど関係なく、今の損得だけを考えて方向が決まってしまう。だから、ほとんどの集落営農組織は経営が行き詰まっており、経営内容が良い集団でも6割の組織では後継経営者がいないという実態なのである。

彼らのところには全国各地から「視察者」の訪問が絶えない。でも、彼らを視察して、その形をまねてみたところで、面白がってそれに取組める「人」がいない限り村は元気になっっていくかないのだ。